

水草研究会第16回全国集会報告

水草研究会の第16回全国集会は、1994年8月6日(土)～7日(日)の2日間、北海道釧路市の北海道教育大学釧路校を会場に行われた。参加者は計45名で、北海道の東の果てという条件にもかかわらず、南は佐賀県から北は地元北海道まで全国各地から参加があった。

8月6日は、研究発表会、総会、懇親会が行われた。研究発表は計12題で、下記の題目にみられるように狭義の水草に関するだけでなく、幅の広い内容であった。

1. 大滝末男(水草研究者)・外山雅寛(江別市立江別小学校)：日本におけるヒンジモの分布
2. A. S. SIDIK・S. A. SAMSON(ムラワルマン大学・水産)・安原健允(日本大学・商)：サマリンダ(カリマンタン, インドネシア)の水草と環境
3. 浜島繁隆(高蔵高校)：塚の杵池(名古屋市名東区)の植生10年の動態
4. 後藤直和：霞ヶ浦の水生植物の現状と過去
5. 村山恵子(新潟大学・教育)・福原晴夫(新潟大学・教育)・関谷国男(新潟大学・理)：アオウキクサ類のプロトプラスト作製による染色体観察と新潟県における分布
6. 丸井英幹(環境設計(株))：霞ヶ浦における水生植物相の変化
7. 高野温子(神戸大学・自然科学研究科)・角野康郎(神戸大学・理・生物)：日本産ヒシ属は何種あるか
8. 尾崎富衛(オニバス育成会)・石田文明・清水重蔵(豊栄市職員)：福島潟におけるオニバスの栽培(保護増殖事業)
9. 国井秀伸(島根大学・汽水研)：ジュンサイの浮葉と地下茎の動態
10. 木村保夫・国井秀伸(島根大学・理・生物)：バイカモ属の酵素多型と形態変異
11. 桜井善雄(応用生態学研究所)・上野直也(山梨県)・荻木新一郎(日本理水設計(株))：千曲川水系におけるネコヤナギの分布特性
12. 神田房行(北海道教育大・釧路・生物)：春採湖におけるクラドフォラの発生状況と水質との関係

総会では加崎英男会長の挨拶と別記の報告と審議が行われた。会長の挨拶の中で前会長の大滝末男氏が自然保護とその啓蒙に貢献したとして田村賞を授賞したことが報告された。

総会に引き続いて懇親会が教育大釧路校の厚生会館食堂で行われた。今回は懇親会費を安くしたのであまり豪華というわけにはいかなかったが、樽生ビールを飲みな



がら北海道の夏を少しは味わっていただけたのではないかと思う。

翌8月7日は釧路湿原を一周するコースでエクスカージョンを行った。案内役は研究会会員でもある釧路市在住の植物研究者、滝田謙氏にお願いした。釧路市内を午前9時に出発し、まず湿原の景観が最も素晴らしいと人気のある、湿原東部のJR細岡駅近くの丘陵地にある通称大展望を訪れ、記念写真を撮った。散策に行っていた数人を取り残したことをこの場をかりてお詫びしておきます。

その後、湿原に戻り、細岡駅のすぐ近くにあるタッコブ沼で水草を観察した。特にここは参加者には珍しい水草だと思われる、ヒンジモが多数生育している所である。皆さん熱心に観察していたので、予定の時間をだいぶオーバーした。すぐに次の観察地塘路湖へと向かった。ここでは特にエゾノミズタデがちょうど開花しており、絶好の被写体となっていた。これも南の方の参加者には馴染みの薄い水草ではなかったのではないかと思う。続いて

シラルトロ湖に行き、多種類の水草を観察した。そして、湖畔で昼食となった。

午後は釧路湿原北部のコッタロ湿原から湿原の景観を楽しみ、湿原の西側に回った。ここでは湿原に流入するいくつかの小川でエゾミクリやオオバイカモを観察した。オオバイカモは最近新たに報告されたものでここで採集されたものがタイプ標本となっているとの説明が角野氏からあった。

エクスカージョンコースも終わりの方となり、環境庁のビジターセンターを訪れ、滝田氏の作製した植物リストを参考にしながら、湿原内に設定された木道を散策した。最後に昨年釧路でおこなわれたラムサール条約締結国会議の直前にできた環境庁のワイルドライフセンターを訪れ職員から解説を聞いた。というわけで無事エクスカージョンも終わり、釧路市内に戻ったのは5時頃であった。当日の夜帰途につく人やもう一泊する人などさまざまであったのでバスを降りた時点でここで解散となった。

(神田 記)

○角野康郎・遊磨正秀共著『ウェットランドの自然』(保育社, 1995年5月, 198p, 2,300円)

自然界が直面するテーマをビジュアルに展開するという保育社のエコロジーガイドシリーズの一冊として出版された本である。見開きのカラーページに見開きの文章が続くという形になっている。

本書のはじめにも書かれているように、「ウェットランド(wetland)」という言葉はあまり聞き慣れない言葉かも知れない。「wetland」は直訳すれば「湿地」となってしまう。しかし、実際にはいわゆる「ラムサール条約」中にある定義のように、「wetland」には、河川や湖沼、あるいは一時的な水溜まりや低潮時における水深が6mを超えない海域など、「湿地」という言葉からはイメージされないさまざまな水域が含まれている。本書の名前に敢えて聞き慣れない「ウェットランド」という言葉を取り入れたのは、これらさまざまな水域の自然を包括的に紹介したいという著者の意図による。

本書は、「日本のウェットランド」、「ウェットランドの環境と自然」、「ウェットランドの危機」、「ウェットランドの現状と保全」という4つの章に大きく分けられる。このうち、本書の中核をなす「ウェットランドの環境と

自然」の章では、河川、水路、湖沼、ため池、水田、湿原、湿地、干潟・塩湿地というさまざまな水域の成因、地形、動植物相などが紹介されている。これに続く「ウェットランドの危機」では、埋め立てられるため池の様子や河川改修の様子、富栄養化によるアオコの大発生、絶滅危惧種など、ウェットランドの憂うべき開発の現状がビジュアルで紹介されている。この章でおわりであれば、ウェットランドに未来は無いと感じてしまうであろうが、最後の「ウェットランドの現状と保全」でこれまでの営みの反省としての保全への取り組みのあり方について若干の紹介がされているのが救いとなっている。

普通このような写真をふんだんに盛り込んだ本は、解説の文章はおうおうにして写真のツマ程度の内容になることが多いのだが、本書は解説ページの内容が充実しており、読みごたえのあるものとなっている。巻末の「ウェットランドの生態」と「人とウェットランドのかかわりの歴史」も興味深い。

限られたページ数の中で、どのような写真を紹介するか、どのような内容を盛り込むかについて、著者らが頭を悩ませたであろうことは想像に難くない。ウェットランドの研究と保全を進めることが急務になっている現在、